

技

匠の職人

愛してやまない「鳥」 父の手法を受け継ぎ、 百年先も色褪せない日本画を描く

日本画家 島田 恒鳳 氏

■略歴：昭和27年岐阜県生まれ
出身：岐阜野鳥クラブ「鳳凰会」会長
得意：花鳥画 師：翠鳳
個展：徳島・眉峰ギャラリー



幼いころから自然に親しみ、鳥の美しさに魅せられ
気がつけば日本画家になっていたという
島田恒鳳先生にお話を伺いました

日本画家になった きっかけは？

高校生のころ、油絵を描くことか
ら絵画の道に入りました。その後、日
本画で好きな鳥を趣味程度に描くよ
うになり、気がつけば日本画家になっ
ていました。父が島田翠鳳^{すいほう}という日
本画家（近代日本画家の巨匠といわ
れる竹内栖鳳^{せいほう}を師とする）だったこ
とも影響しているのかもしれない。

日本画は油絵には無い特有の魅力
があります。油絵のように影を描き、
立体感を出す手法とは異なり、色を
塗り重ねることで奥行きを出しま
す。私の好きなモチーフである小鳥

鳥たちのどんなところに 魅力を感じますか？

小さな体でも厳しい環境の中で生き
抜いている鳥たちの姿には驚きと感動を
覚えます。例えば『イスカ』という鳥は主
食のマツボックリの実が食べやすいよう
にクチバシがまがついています。知らない人
が見るとかわった形に見えるその姿にも
ちゃんと意味があるのですね。また、絵に
はできませんが鳥の鳴き声にもそれぞ
れ特徴があり、楽しませてくれます。人
は昔から『センダイムシクイ』の「焼酎一
杯グイ」や『ホトトギス』の「おつあんこ
けたか」など、鳥のさえずりを言葉に置
き換えて表しているのも面白いですね。

幼いころから自然が好きで、父に釣
りに連れて行ってもらった時に木々の
間から鳥たちを垣間見ていました。そ
のかわいらしい表情や動きに魅せら
れ、中学生の頃には時間があると近く
の山や川に出向き、鳥の写真を撮った
りしていましたね。そんな鳥の魅力
を皆さんにもっと知っていただきたい
と思っています。

作品の中できつぎついで 輝いて見えるのは…？

それは、絵具の中に胡粉^{こふん}を混ぜ、地



「私はナッツを食事代わりに持ち歩いていたり、友人から
前世は鳥ではないかと言われています」と島田先生。



根強い人気の孔雀絵。華
麗で奥深い色合いの羽は
何度も色を塗り重ねるた
め、制作日数は1カ月余り
かかります。



少しずつ集めなくなる愛らしい小鳥の
色紙。会場で話される島田先生の魅力
たつぷりのお話も聞き逃せません。

たちのかわいらしい表情や羽毛の繊
細な美しさは、色を塗り重ねる日本
画の方がより鮮明に表現すること
ができ、自然に日本画の世界に入っ
ていったのだと思っています。

20代では鳥の絵ばかり描いてい
て、地元の岐阜の百貨店から「個展を
開かないか」と声をかけられ、鳥の絵
の個展を初めて開きました。それが
評判になり、いろいろなところから
声をかけられるようになりました。
そんな経緯を経て本格的に日本画
家になったのは30代のころからです。



イスカの色紙

塗りに金・銀を少し振り掛けていま
す。それが輝いて見えているのです。
一般的に色は年月が経つと色褪せ、
色が抜けてきます。私の創る掛軸は、
10年20年経つても色褪せません。大切
に使っていただければ、百年でも鮮やか
な色を楽しむことができます。

日本画は和紙や絹などの地に墨岩
絵具、胡粉、染料などの天然絵具を用
い描くのですが、掛軸は絹地を使用し
ます。私は絹地の裏面にも墨で下絵を
描き、表には胡粉を混ぜて描くこと
で、年月が経つごとに絵が浮き出ると
いう手法を用いています。これは父が
亡くなってから、父の描きつづしの画
から偶然発見した手法です。

今後は鳥はもちろん、自然の中で見
たものをそのまま絵に出来ればと考
えています。山小屋で自然を感じなが
ら、絵になる部分を切り取ったような
画創りができれば幸せですね。